

# 遠距離恋愛における「距離」は どんな「敵」か？\*

甲斐雅之

## 1. はじめに

まず(1)の歌詞の一節を見ていただきたい。

### (1) ため息ついてドアが閉まる

何も云わなくていい

力を下さい

距離にまけぬよう (松任谷由実「シンデレラエクスプレス」)

この歌は遠距離恋愛中の女性の心情を綴ったものである。引用した箇所は恋人が列車に乗って自分が住む街に帰っていくのを見送りに来たという設定である。下線部の「距離に負けぬよう」の箇所から、その女性が恋人とのふだんの「(物理的な)距離」を「戦いの相手(敵)」と見立て、「勝つか」「負ける」で人生の選択肢が変わってくるかのように考えていることが分かる。遠距離恋愛における恋人との「距離」を「敵」と捉えて表現しているということは、彼女は遠距離恋愛がある種の「戦い」であるかのように理解しているのだろうか。

本小論では、本来中立的な概念を表すはずの「距離」が遠距離恋愛のコンテキストに用いられその中立性を失い、「敵」と解される認知的な仕組みについ

---

\* 本稿は、2008年5月29日に行われた「京都女子大学英文学科春季公開講座」で「J-POPの意味論」と題して行った講演の内容に基づいている。

て、Lakoff and Johnson (1980, 1999)、Lakoff and Turner (1989)、Lakoff (1993)、Grady (1997)、鍋島 (2011) 等の認知メタファー理論の観点から探っていききたい。

## 2. 遠距離恋愛は戦いか？

(1) の歌詞の引用では遠距離恋愛においては「距離」があたかも戦いの相手であるかのように捉えられ、その見立てに基づいて「距離に負けぬように」というメタファー表現が使用されていると考えられる。ところで、恋愛を「戦い」に見立てていると言え、《恋愛は戦いだ (=LOVE IS WAR)》<sup>1</sup> (Lakoff and Johnson, 1980: 49) のメタファーが知られている。(2) にLakoff and Johnson (1980) からの用例を一部あげる。(原文のとおり「戦い」に関わる概念が関係している箇所はイタリック体にしてある)

- (2) a. He is known for his many rapid *conquests*.  
 b. She *fought for* him, but his mistress won out.  
 c. He *fled from* her advances.  
 d. She *pursued him relentlessly*.

日本語の例としては次のようなものも《恋愛は戦いだ》のメタファーに基づいていると考えられる。

- (3) 弱った彼への対処で恋のライバルに勝つ方法

(<http://cocoloni.jp/culture/49380/>)<sup>2</sup>

1 以下、《恋愛は戦いだ》のように《 》で括ったコンピュータ文は、それが概念メタファーであることを示す。

2 インターネットからの検索例は、すべて2015年12月現在のものである。なお、英語の例についてはネイティブスピーカーのチェックを受けている。

(2) と (3) の例からも分かるとおり、《恋愛は戦いだ》のメタファーでは、概ね恋愛の成就が目標であり、その過程の種々の側面が「戦い」に関わる概念を用いて表現されている。また、その過程に関わる者は「戦い」の関与者となり、その相手との戦いに勝つことは恋が成就することを意味することになる。(2a) では *conquests* (征服) が「目当ての女性を口説き落とすこと」を、(2b) では *advances* (前進) が「女性の求愛」を、(2c) では *fled* (逃亡した) がその女性の求愛から「逃れた」ことを表し、(2d) では *pursue* (追跡する) は「しつこく求愛する」ことを表している。(2) の例は「戦い」の当事者が恋愛の相手であるが、(3) の例は同じ異性に好かれようと競い合っている相手を「戦い」の相手として捉えている。このように、恋愛の概念における経験の構造が「戦い」における概念の構造と符合しているので、《恋愛は戦いだ》のメタファーが成り立つわけである。

それでは、「距離」を戦いの相手として捉えている「距離に負けない」というメタファー表現も《恋愛は戦いだ》のメタファーを通して成り立っているのだろうか。結論から言えば、《恋愛は戦いだ》のメタファーによって「距離に負けない」という表現が成立しているのではない。なぜならば、戦いの相手が恋愛の当事者ではなく「距離」という意思を持たない概念だからである。「距離」を戦いの相手と看做すためには擬人化によって「距離」が「戦い」の参加者として解釈されなければならない。また、遠距離恋愛の現実を考えると、既に当事者の愛情が確認されて恋愛関係が成立し、遠距離恋愛がうまく行くと関係が維持されている場合であると考えられる。遠距離恋愛においては、その最終的目標は2人が結ばれて結婚することであろうし、そうでなければ2人が別れることになるだろう。つまり、遠距離恋愛が《恋愛は戦いだ》で捉えられる恋愛とは異なるものであり、遠距離恋愛における「距離」は《恋愛は戦いだ》とは別のメタファーを通して理解されているということになるのではないかと考えられる。

では、遠距離恋愛における「距離」は《恋愛は戦いだ》における「戦いの参

与者」としての「敵」でないとすれば、どのような性質を持つ「敵」なのだろうか。次節以降、その「距離」が「敵」として概念化される認知的な仕組みについて遠距離恋愛の現実を念頭に置きつつ明らかにしていきたい。

### 3. 遠距離恋愛の「旅」としての側面

2節でも触れたが、メタファーの基盤になるわれわれの遠距離恋愛に関する知識について確認しておきたい。恋愛関係において恋人同士は心理的にも物理的にも距離が近いのが理想である。遠距離恋愛では、恋人同士が物理的に離れている中で心理的な近さを維持するのは課題となる。距離が離れることで、2人である時間に制約が生じるし、会いに行くための経済的負担も大きくなる。遠距離恋愛は、距離が遠くなるだけでなく、恋人同士の間に様々な困難をもたらすのである。しかし、遠くに離れてまで恋愛関係を維持するということは、恋人同士である2人が典型的には結婚という形で目標を達成することになると考えるのが自然ではないだろうか。そういう意味では、遠距離恋愛は人生のひとつの段階であり、《人生は旅だ》のメタファーで捉えた場合の一行程であると看做せる。さらに、遠距離恋愛が、最終的に恋人同士が結ばれる、あるいは遠距離恋愛の状態が解消されることを前提にするのならば、遠距離恋愛そのものが一定期間継続する恋愛関係における一期間と看做し、《恋愛は旅だ》で捉えることのできる「旅」の一部とも解釈可能ではないだろうか。つまり、遠距離恋愛は、《恋愛は戦いだ》で捉えられる側面ではなく、《恋愛は旅だ》のメタファーで語られる側面を持つのである。

遠距離恋愛が《恋愛は旅だ》で捉えられる「旅」の一行程ということを明らかにしたわけだが、ここで Lakoff and Johnson (1997: 64) があげる《恋愛は旅だ》のメタファーにおける恋愛と旅の対応について確認してみたい。

#### (4) a. Love Is A Journey

#### b. The Lover Are Travelers

c. Their Common Life Goals Are Destinations

c. The Relationship Is A Vehicle

d. Difficulties Are Impediments To Motion

(4) は目標領域（「恋愛」）と根源領域（「旅」）要素間の対応をひとつひとつ述べたものである。つまり、「旅人」としての「恋人同士」が「関係」という「乗り物」に乗り「人生の共通の目標」に向かって進んでおり（つまり、関係の進展）、「困難（difficulties）」はその関係の進展の妨げとなるということである。

Lakoff（1993: 220）やLakoff and Johnson（1997: 188-9）では、さらに（4d）における「困難」は進行を妨げる種々の具象物として概念化されるとしている。英語では少なくとも次の5つの形で表現化されることが指摘されている。

(5) 障害物 (Blockages)

a. Harry got over the divorce.

b. She's trying to get around the regulations.

(6) 地勢上の特徴 (Features of the terrain)

We've been hacking our way through a jungle of regulations.

(7) 重荷 (Burdens)

a. He's weighed down by a lot of assignments.

b. He's been trying to shoulder all the responsibility.

(8) 抗力 (Counterforces)

She's holding him back.

(9) エネルギー源の欠如 (Lack of an Energy Source)

We're running out of steam. (Lakoff 1993: 220)

日本語でも、「困難」のカテゴリのひとつである「問題」を用いた例から、少なくとも「困難」が(10)の「障害物」や(11)の「重荷」として表現されることが分かる。

- (10) a. 問題にぶつかる
- b. 問題を乗り越える (鍋島, 2011: 266)
- (11) a. 問題を抱える
- b. 問題を背負う (鍋島, 2011: 266)

さて、《恋愛は旅だ》のメタファーに関する対応を遠距離恋愛における「距離」との関係について当てはめてみたい。遠距離恋愛における恋人同士の物理的「距離」は、恋愛において様々な困難のひとつである。そして、その「距離」は恋愛関係における最終的な目標（たとえば、結婚等）に向かって進んでいる2人の妨げということになる。そうだとすると、「困難」のひとつである「距離」も何らかの形で恋人同士の関係の進展を妨げるものとして表現されるはずである。次の歌詞の一節を見てみよう。

- (12) 今頃雪が降って街中白く染める
- 私のことを思うあなたを消して
- こんなに遠い場所でどんなに思っても
- いつかは忘れられる雪と距離に邪魔されて…

(a.mia 「LAT.43° N ~ forty-three degrees north latitude ~」)

この歌は遠く離れた雪深い北の街にいる恋人を想う女性の心情を歌ったものである。「雪」も「距離」も文字通りの意味にも比喩的な意味にも解釈できるという点では独創的であるが、少なくとも「距離」に関する部分についてのみ考えると、2人の恋愛を邪魔する「障害物」として表現されていることは確かであ

る。(13) の例を見てみよう。

(13) 双方の強い気持ちがあれば距離を乗り越えること自体は決して困難ではないが、淋しさや切なさが募ることを防ぐことは難しい。

(<http://netallica.yahoo.co.jp/news/20150926-00000005-watcher>)

(13) では、(12) の歌詞における「距離」と同様「距離」を「障害物」と見立てている。

さて、本節では遠距離恋愛における恋愛は《恋愛は旅だ》のメタファーに基づいて捉えられる関係であることを明らかにした。そして、「距離」は恋愛という旅における関係の進展の妨げ、すなわち「困難」であることを示した。では、「距離」を「敵」と解する見方はどこから出てくるのだろうか。次節で考えてみることにする。

#### 4. 遠距離恋愛における「敵」としての「距離」

Grady (1997: 167) は、Lakoff (1993) や Lakoff and Johnson (1997) とは別に、プライマリーメタファーのひとつとして《困難は敵 (DIFFICULTIES ARE OPPONENTS)》を設定している。

(14) I've been fighting a flu all week.

(14) の例では、健康の維持に対する障害（病気）を「敵」と見なし、“fight a flu” というメタファー表現が用いられている。Grady (ibid.) によれば、このメタファーはわれわれが人と物理的に格闘する際に発生するフラストレーション (frustration) や肉体の酷使 (exertion) の経験が基盤となっているとする。

これに対し、鍋島 (2011: 102) は、別の角度からこのメタファーに基盤を与えている。鍋島 (ibid) は、従来の認知メタファー理論がメタファーの基盤と

して据える共起性以外に、ある概念が持つ評価性も基盤となってメタファーを形成するという主張を行っている<sup>3</sup>。評価性の概念自体は、楠見（1995）の情緒・感情的意味の枠組みを採用したものであるが、鍋島（2011: 83）によれば、「評価性は、通常の辞書的意味とは別に、いい感じや嫌な感じ、大きい感じや小さい感じといった感覚的、印象的な意味が存在し、これがメタファーを構成する重要な要因となる」と述べている。そして、鍋島（2011: 164-5）は、マイナスの評価性を持つ出来事は「敵」と捉えられることが多いと指摘する。

(15) a. 貧困と戦う

b. 不良債権は現代日本経済の敵だ

c. 爆発する危険性が潜んでいる

d. 不安感につきまとわれる

e. 恐怖に襲われる

鍋島（ibid.）が指摘したことが《マイナスの評価性を持つものは敵だ》という形で一般化できるとすれば、「困難」という概念が持つマイナスの評価性を基盤にして《困難は敵だ》というメタファーが形成されることになる。

《困難は敵だ》というメタファーの成立に、上述の Grady（1997）が言うように共起性が基盤となっているのか、それとも鍋島（2011）が主張するように評価性が基盤となっているかについては、議論の余地があるように思われる。しかし、メタファー研究における理論的整合性を考慮し（cf. 谷口（2003:116-7）、本稿では、鍋島（2011）の考え方を支持しマイナスの評価性が《困難は敵だ》の基盤となっているということにしたい。

それでは、どのようにして遠距離恋愛における「距離」を「敵」と看做せるかについて考えてみたい。「距離」という概念はそれ自体中立的である。《恋愛は旅だ》のメタファーの要素である「困難」はそれが持つマイナスの評価性から

3 なお、鍋島（2011: 102）は、メタファーの基盤には共起性基盤、構造的基盤、評価性基盤、カテゴリー性基盤の4類型があることを認めている。



「敵」として概念化される。そして「距離」の概念は、遠距離恋愛というコンテクストを与えられることで「困難」のひとつとしてマイナスの評価性を与えられる。「距離」は《困難は敵だ》のメタファーを下地として、遠距離恋愛という限定的なコンテクストにおいて、「敵」としての概念化が可能となる。このようにして、次の(16)～(21)の諸例にみられるような「距離」を「敵」と看做したメタファー表現が生まれることになる<sup>4</sup>。

(16) 彼氏が遠距離恋愛に疲れた…? 距離に負けそうになったときは!

(<http://motejo.jp/couple/long-distance-relationship-tired.html>)

(17) 距離恋愛と聞くと、会えない、距離に勝つ自信がない…などとネガティブな発想に陥ってしまいやすいですが、近距離恋愛よりも幸せになれる秘訣があることを知っていましたか?

4 (16)～(21)は、鍋島(2011: 262-3)が「困難」の一種である「問題」について議論した際の用例を参考にしたものである。元になったのは、(i)の諸例である。用例の検索にはGoogle検索エンジンを用い、当該メタファー表現と「遠距離恋愛」をキーワードと設定した(2015年12月現在)。(ia)の「真っ向から立ち向かう」については用例のヒット率を上げるため「真っ向から」という様態を表す語を省いて検索した。用例に続く( )内は、鍋島(ibid)が痕跡的多義かどうかの確認を行うために付したものである。

- (i) a. 問題に真っ向から立ち向かう (敵に真っ向から立ち向かう)  
 b. 問題と戦う (敵と戦う)  
 c. 問題に悩まされる (敵に悩まされる)  
 d. 問題にてこずる (敵にてこずる)  
 e. 問題が手に負えない (敵が手に負えない)  
 f. 問題に付きまとわれる (敵に付きまとわれる)  
 g. 問題と取り組む (?敵と取り組む)  
 h. 問題に取り組む (\*敵に取り組む)

結果としては、(16)～(21)であげた「負ける」「勝つ」「打ち勝つ」「克服する」「戦う」「悩まされる」の組み合わせしか見つからなかった。なお、「遠距離」と具体的に表現することで、「距離」が持つ評価性に関する中立性が失われるという可能性があるため、(ii)のような「遠距離」に関する例は含めていない。

- (ii) 遠距離と向き合うことと大切な想い (<http://aikoi-lma.sblo.jp/>)

(<https://4meee.com/articles/view/456317>)

(18) 距離に打ち勝つぞっ！ (<http://mery.jp/18116>)

(19) 遠距離恋愛をしていた相手との復縁を望むならば、距離を克服して相手の気持ちを自分に取り戻すという努力をしてみましょう。<sup>5</sup>

(<http://americanstadium.com/enkyori/>)

(20) 本当にこだわらないといけなかったのは距離と戦うことではなく、彼女の気持ちだった・・・

(<http://www.momocafe.ouchi.to/cgihappy/smile/love/read.cgi?mode=past&no=5762>)

(21) どちらかが転職をしてそばに行けばいいわけですから、不可能じゃないと思います。これならいつでも会えるし、距離に悩まされる事もありませんよね。 (<http://pc-kakaku.info/howto/local.html>)

さらに日本語だけでなく、英語においても遠距離恋愛における「距離」が「敵」として概念化されている例がある。(22)～(24)の例を見てみよう。

(22) Fight the distance, not each other — and do that together.

---

5 「克服する」は、通例「困難に打ち勝つ」の意味で用いられるので、《困難は障害だ》がこのメタファー表現の下地になっていると考えられるかもしれない。しかし、(i)の例からも分かるように「戦いに勝ち敵を服従させること」(『精選版日本国語大辞典』)の意味でも用いられるので、《困難は敵だ》が根底にあるメタファー表現と考える方が妥当であろう。

(i) T-34は長砲身の76ミリ砲を主砲としており、戦争初期のドイツ戦車をも含め、戦場に現れたあらゆる敵を克服する力を持っていた。

(<http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/5870/statiya1.1.html>)

(<http://larryandcarla.com/wordpress/long-distance-relationships/living-with-a-long-distance-relationship/arguments/>)

(23) Don't get defeated by the distance between you.

(<https://scaletwin.wordpress.com/tag/long-distance-relationship/>)

(24) However you do not have to let the strain of being apart ruin your relationship, there are ways to overcome the distance separating you from your loved one. (<http://familymattersfirst.org/blog/long-distance-relationships-strain-on-any-relationship/>)

《困難は敵だ》を基にして「距離」が「敵」であると看做すメタファー表現が日英語において文化を越えて存在するのは興味深い<sup>6</sup>。

ところで、以上のように遠距離恋愛における「距離」が「敵」と概念化されるのなら、《距離は敵だ》のようなメタファーが存在するのだろうか。本稿の結論としては、《距離は敵だ》のようなメタファーは存在しないとしたい。「貧困」といったそれ自体で「困難」のカテゴリーの一種として認められ、「困難」に関わる推論がある程度そのまま当てはまる概念であれば（鍋島, 2011:169）、メタファーの継承（鍋島, 2011:96）<sup>7</sup>を通して《貧困は敵だ》のようなメタファーは成立する。しかし、これまで見てきたように、「距離」は限られたコンテキストでしか「困難」のひとつとして理解されず、表現の多様性も見られない可能性が

6 英語でも《困難は障害物だ》から「距離は障害物だ」の対応の例も見られる。

(i) In time though, we've found ways to get over the distance and break those long distance relationship myths.

(<http://www.womenonfireclub.com/real-women-stories/yoana-laura-craciun/>)

7 メタファーの継承と具現化について、鍋島（2011：99）は「具現化とはモト領域の概念のある属性から、その属性を持つ具体物が想起されることであり、典型的かつ偶発的である。これに対して継承は上位概念が持つ主要な写像が下位概念に引き継がれることであり、構造的である」と簡潔にまとめている。それぞれの定義の詳細については、鍋島（2011:95-98）を参照。

ある。したがって、「距離は敵だ」のような対応が存在したとしても、それは《困難は敵だ》の具現化（鍋島, 2011: 98）にすぎないのである。

### 5. 遠距離恋愛以外に「距離」を「敵」と看做す例

遠距離恋愛のコンテキスト以外においても「距離」は「敵」として概念化することは可能なのだろうか。

自分が行きたい場所が遠く離れた場所の場合、そこにたどり着くためには様々な困難が想定される。すなわち、移動手段、時間的余裕や経済的な問題等、遠くに住んでいるためにお互いが会うことすら難しいという遠距離恋愛中の恋人同士の状況と共通点がある。次の例を見て頂きたい。

(25) a. 行きたい所は遠いところ。でも、私は距離に負けない。

(<http://yuganatabi.sakura.ne.jp/distance.html>)

b. 結局、好奇心が距離に勝つのか負けるのか、JR東海のこのキャンペーンは、「距離に負けるな好奇心」と若者へ応援歌を送る。

(<http://homepage3.nifty.com/gochan/hp980817/express/exp1.htm>)

(25a) はその場所に行きたいと思っている本人が主語であり、(25b) では擬人化された好奇心が主語である例である。これらの例では、種々の想定される事情から「距離」が目的地への移動に対する「困難」として解されることでマイナスの評価性を与えられる。そして、「距離」は《困難は敵だ》を基にして「敵」として概念化されている。

次の (26) の例は競馬に関する記事のタイトルからである。

(26) 「距離との戦い」を楽しむ、2015菊花賞

(<http://allabout.co.jp/gm/gc/459553/>)

競馬は競走距離によって距離区分が決まっている。ある競走馬は短距離のレースに強いが、長距離のレースについては未知数、あるいは強くないという場合も考えられる。そういうコンテクストでは、その競走馬（とその騎手）にとって「距離」は競走に勝利するという目的達成のための「困難」のひとつと理解される。その結果「距離」はマイナスの評価性を与えられ、《困難は敵だ》を下地として「敵」だと看做されるようになるのである。

(27) はバードウォッチングに関する記事からの引用である。

(27) 干潟をよく探すと、ソリハシシギがいました。でも遠すぎて手に負えない距離です (http://kirara-h.com/files/2015092117421289\_1.pdf)

(27) の背景としては自分たちが持ってきた望遠鏡ではよく見えないくらい離れた距離に鳥（ソリハシシギ）がいるという状況がある。この「手に負えない距離」は、望遠鏡の性能に対して「距離」を「敵」と解釈することで成立しているメタファー表現である。すなわち、「距離」が手持ちの望遠鏡によって鳥を見るという目的を達成するための「困難」と解釈され、「距離」がマイナスの評価性を与えられことで「敵」として概念化されているのである。

## 6. 結 語

以上、中立的な概念であるはずの「距離」という言葉が遠距離恋愛のコンテクストにおいて「敵」と解釈されているメタファー表現について考察を行ってきた。これまでの議論をまとめると、「距離」は《恋愛は旅だ》のメタファーを基本にして遠距離恋愛における「距離」が「困難」の属性を持つことになる。そして、「困難」からの関連からは《困難は敵だ》というメタファー表現を基にして「困難」の一種として認められた「距離」が「敵」と看做される。このことにより、コンテクストが限られるため表現の多様性は期待できないが、本来は中立的なはずの「距離」を「敵」と概念化したメタファー表現が可能になる

のである。また、遠距離恋愛のコンテクスト以外でも「距離」を「敵」と解釈できるような状況があれば、「距離」を「敵」とするメタファー表現は成立可能である。

最後に、今回は日本語の個々の表現についてインターネットでの検索例に基づいて考察を行ったが、今後は見いだされなかった例についても適切な状況設定に基づいた作例を行ったうえでインフォーマント調査を実施し、より精密な議論を行う必要があると考えている。

### 主要参考文献

- Grady, J. 1997. *Foundations of meaning: Primary metaphors and primary scenes*. Ph.D. dissertation, University of Berkley.
- 楠見 孝. 1995. 『比喩の処理過程と意味構造』 風間書房.
- Lakoff, G. 1993. "The contemporary theory of metaphor." in Ortony, A. ed., *Metaphor and thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors we live by*, University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books.
- Lakoff, George and Mark T. 1989. *More than cool reason: a field guide to poetic metaphor*, Chicago: University of Chicago Press.
- 鍋島弘治朗. 2011. 『日本語のメタファー』 くろしお出版.
- 小学館辞書編集部 編. 2006. 『精選版日本国語大辞典』 小学館.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』 研究社.